九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州50年よもやま話

内藤, 莞爾

https://doi.org/10.15017/2338945

出版情報：九州人類学会報. 30, pp.1-3, 2003-07-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

《九州人類学会報30号記念特集(1)
—九州人類学研究会の30年を振り返って—》

九州50年よもやま話

内藤　莞爾

Ⅰ．九州以前

九人研には、私は発足当時からの会員である。いや発起人のひとりであった。しかし顧れば、どうも熱心な会員ではなかった。記録の類も散佚しているし、記憶もおぼろげである。それでここでは、九人研のこととは別に、私をとりまいて九州で起こったこと、それに関連して、民族学（人類学）について、思いつくままに綴ってみたい。

1．民族研究所のこと

私は、1950年、神戸大学から九州大学に移った。そして定年で九大を辞めて、8年間を東京の立正大学で過ごし、また九州に戻ってきた。以後、久留米大学その他で非常勤講師を務めたが、今は浪々の身である。終生、社会学が看板だが、ただ3年間だけ、民族学で給料を頂いた。民族研究所の3年間がそれである。日中戦争から世界大戦へと、東亜民族に関する知識が求められるようになってきた。こうして1942年、文部省の外局のような形で民族研究所が発足した。幸い私は助手に採用され、お蔭で兵隊を免れ、中国の南部からインドシナ半島に住む諸民族の研究に従事した。黎族の住む海南島の調査をすることもできた。当時の大学には、民族学や文化人類学の講座は皆無であった。勢い研究所のスタッフも、2、3の専門家は別にして、関連・隣接の学問から選ばれることになった。やや組織をなしている団体に日本民族学会と民族学研究所があったが、学問としては、民族学以外、社会学・東洋史・宗教学・民俗学などがそれである。所長の高田保馬以下、所員に岡正雄、古野清人、小山栄三、江上波夫、牧野巽、八幡一郎、関敬吾、杉浦健一、助手に及川宏、鈴木二郎、内藤莞爾、等々。こうした顔触れなので、いま「日本民族学会」の理事などを務め、その看板を「日本文化人類学会」に塗りかえようとしているお歴々など、まだ「ご幼少」で、出る幕がなかった。

2．古野清人氏との出会い

民族学研究所は、終戦に伴って解散になり、私は暫く本省の三級事務官を務め、神戸大学に移った。新制大学の発足に伴う人事であって、そこではマリノフスキーに詳しい堀喜望氏とお近づきになった。ただ神戸大学での任期は1年半で、九大に移ることになった。さきに記したように、1950年のことである。私の九大移籍については、複数の人脈があるが、最大は古野清人氏との因縁である。同氏は現在の宗像市の出身、郷土愛のあまり、「神郡宗像」を唱えていた。外交官を志して東大法学部に入学、のち文学部の社会学科に移り、失望してさらに宗教学科に転じた。周知のように、同氏は日本における宗教社会学の草分け的存在。一方、私はM.ウェーバーに学び、1940年、「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」にヒントを得て、浄土真宗の教理のうちに近江商人の経済倫理のルーツを発見、学部

の卒業論文に纏めた。ところがこれが予想外の評判（？）になって、古野氏の知遇を得るたよりとなった。また私は旧制高校でフランス語を専攻したので、語学の点でも、古野氏と一致した。そこで私も、M.ウェーバーを積み残しにして、古野氏に倣い、デュルケムをはじめ、フランス社会学の日本上陸に進んだ。なおM.ウェーバーとは、戦後、彼の「社会学の基礎概念」の訳出で再会した。

II．九州でのイベント

1．末子相続の初体験

1961年、九大は「学術探検研究会」(SESKU) をスタートさせた。戦禍も収まって、海外の学術調査も出来そうになった。これに備えて、内地でトレーニングをしよう。これが研究会の趣旨で、とりあえず東シナ海の離党・甑島がその場所に選ばれた。当時、教育学部に吉田禎吾氏がおられたので、相談のうえ、下甑島の一部落を取りあげて、いわゆるcommunity studyを試みた。そのときわれわれには、離島からの連想で、トロブリアント島（マリノフスキー）やアンダマン島（ラドクリフ・ブラウン）などのイメージがあった。調査の結果は、「離島村落の社会人類学的研究」と題して、『民族学研究』(30巻3号、1965) に報告しておいた。が、とてもマリノフスキーやラドクリフ・ブラウンに及ぶものではない。“explanatory”な報告に終わったが、ただ私としては、この調査のとき、初めて「いわゆる末子相続」に出会った。次男が跡を取ったり、長男が隣に分家したり、三男のところに隠居した親がいたり、等々。もちろん私は、九州の西南部に末子相続の慣行のあることは、民俗学その他の文献で承知していた。けれども関東で育った私には、民法の示す長子家督が既成概念となって動かない。だから次男が跡を取ったり、親が三男のところで隠居していても、これは長子相続の崩れた形ぐらいにしか考えなかった。なおこの調査では、焦点を村レベルの現象に当てていた。勢い末子相続のような、家レベルの現象を掘り下げなかったことが、返す返すも残念であった。

2．末子相続への取り組み

私の末子相続への取り組みは、川口諦氏の『村落社会研究』誌（1965）所収の鹿児島農家の研究で大きく開眼した。この報告では、家族慣行がテーマに採用されている。当地の農家は、長子家督にこだわらない。だから男子は、成人とともに家を出ていく。結局、末子の相続になることが多いけれども、しかしそうなるとは限らない。父親の跡は、どの子供が継いでも構わない。いや継がなくてもよい。こうして老人だけの隠居世帯が現われる。つまり鹿児島の農家は、世代継承に関して、一定のルールを欠いている。鹿児島県の人口は、全国一の流出率を示している。それもこうしたルールの欠如が原因である。川口氏は、農業経済学の専攻だが、この論文は、明らかに社会学的である。社会変動の原因を外部の経済的要因でなく、内部の家族慣行に求めているからである。

私はこの川口論文によって、大きく刺激された。ただこの論文は、シャープな構想にもかかわらず、これを裏づける資料が乏しい。こうして私の末子相続慣行の採訪は、天草下島の漁村からスタートすることになった。以来、私の行脚は、西南九州の全域にわたって、10年以上続いた。その間、学園紛争のために空白の期間もあったけれども、学問の灯は、絶やすことはなかった。コースは、五島列島のキリスト教系（カトリックと隠れキリシタン）家族にまで延長された。末子相続を報告した専門書も、4

冊を書いた。自画自賛になるけれども、ライフワークと呼んでよいであろう。

というわけで私と末子相続との関係は、10数年に及んだ。当初はそのアプローチに乱れがあったが、のちは一貫して、次の2点に留意して、この研究を進めることになった。

(1) 家ごとの特殊事情にさきだって、地域の伝統的な慣行に注目する（対象の側）

(2) そのために最小単位として「部落」を取りあげて、これに計数的に処理する（方法の側）。

(1)と(2)を合わせると、「社会学的分析」と呼んでよいであろう。もともと末子相続の研究は、フレーザーに発する。『旧約聖書の民俗』（J.G.Frazer, *Folklore in the Old Testament*, vol.II, 1919）がそれである。「創世記」によると、アブラハム、イサク、ヤコブはいずれも弟も、兄を凌いで相続した。そしてフレーザーは、その原因をヘブライ民族の遊牧生活に求めた。遊牧による家族の移動は、兄たちの順次放出を結果し、末子の相続を必然的にする。気宇壮大なロマンである。冒頭に述べたように、私は3年間しか、民族学の禄をはまなかった。しかし末子相続の研究史を遡ると、民族学に達する。浅からざる因縁である。けれどもフレーザー流の古典民族学は、もう今日では通用しない。新しい酒には、新しい皮袋が必要であろう。

付記

紙幅に若干の余裕があるので、次の事項を付記する。題名を付ければ、末子相続の研究が、学界で「知的市民権を得ていった軌跡」とも言えるであろう。

(1) 1968. 5　日本民族学会第7回研究大会（東洋大学）

シンポジウムⅠ：日本の親族組織をめぐって

報告者：蒲生正男、中根千枝、執行嵐

討論者：内藤莞爾、竹田旦、竹内利美

司　会：大給近達、高橋統一

(2) 1970.10　日本民族学会・日本人類学会第24回連合（久留米大学）

シンポジウム：末子相続と社会構造

話題提供者

1．民俗慣行としての末子相続　竹田旦（東教大）

2．不定相続としての末子相続　内藤莞爾（九州大）

3．末子相続と社会構造　中尾英俊（西南学院大）

4．いわゆる末子相続説の立論に関する疑問点　野口武徳（成城大）

討論会：有地亨（九州大）、中根千枝（東京大）、松園万亀雄（天理大）、村武精一（都立大）、米山俊直（甲南大）、吉田禎吾（東京大）

(3) 1973. 2『末子相続の研究』（弘文堂）刊行

(4) 1974.10　文学博士号を授与（早稲田大学第385号）

題　目：末子相続の研究

(5) 1975.11　西日本文化賞受賞（西日本新聞社）

受賞の対象：末子相続の研究

(6) 1976.10　日本社会学会　会長講演「いわゆる西南型家族について」

(7) 1980. 3　九州大学最終講義「末子相続事始」

—2003. 1—